

B206

# 『ロミオとジュリエット』における家族と恋愛

## —離散値系ウェーブレット多重解像度解析—

井波 真弓<sup>○</sup> (白百合女子大学), 齋藤 兆古 (法政大学), 堀井 清之 (白百合女子大学)

### Family and Love in "Romeo and Juliet" —Discrete Wavelets Multi-Resolution Analysis— Mayumi INAMI, Yoshifuru SAITO and Kiyoshi HORII

#### ABSTRACT

Elements, "Love", "Hatred" and "Death" in "Romeo and Juliet" written by William Shakespeare were examined by the discrete wavelets multi-resolution analysis. As a result, it is shown how the "Hatred" of the fighting two families changed to reconciliation through "Love" and "Death" of lovers. The wavelet analysis was visualized the "Love" and "Death" of the love story's of Romeo and Juliet and "Hatred" of hostility families. Further, it is clarified that "Hatred" of both families influences not only love but also fate of the hero and the heroin. On the other hand "Hatred" leads an opportunity of switch "Love" in the first half to "Death" in the latter half.

**Keywords:** Discrete wavelets multi-resolution analysis, Love, Hatred, Death

#### 1. 緒論

二人の若者の恋愛悲劇を描いた『ロミオとジュリエット』<sup>1)</sup>の「愛」、「憎しみ」、「死」を構成する要素は既往研究<sup>2)・6)</sup>で得られているが、それらの要素の揺れについて構成要素ごとに検証したものはない。そこで、本稿ではウェーブレット多重解像度解析を用いて構成要素ごとの揺れを可視化し検証することを目的とする。

『ロミオとジュリエット』"Romeo and Juliet" (1595年頃) はイギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare, 1564~1616) による悲劇の代表作品である。四大悲劇 (『ハムレット』, 『マクベス』, 『オセロ』, 『リア王』) のような重厚な悲劇とは見なされていない<sup>2)</sup>が、憎しみ合う二つの家の勢力争いのもとで、二人の恋人が死に至る作品は恋愛悲劇の典型として後世の人々に愛されており、バレエやオペラの分野においても人気が高い。日本での初演は1904年、伊井容峰一座による真砂の公演で、現在でも上演の回数が多い。

本作品の二つのプロット<sup>5)</sup>はロミオとジュリエットの恋物語と敵対するモンタギュー家とキャピュレット家である。若い性急な愛が両家の憎しみや運命によって悲劇的な結末へと導かれるこの作品は「愛と死」<sup>7)</sup>、「愛と憎しみ」<sup>8)</sup>の間で揺れ動く悲劇であることが示されている。また、精神分析の視点から作品が死で彩られている<sup>7)</sup>との指摘もある。

#### 2. 解析方法

#### 2.1 解析対象

14世紀のイタリアの都市ヴェローナではモンタギュー家とキャピュレット家が、抗争を繰り返している。

モンタギュー家の一人息子ロミオは、敵対するキャピュレット家のパーティに紛れ込んだ際、キャピュレット家の一人娘ジュリエットに出会い恋に落ちる。二人は修道僧ロレンスの元で秘かに結婚するもその直後、ロミオは親友マキューシオが殺された仕返しにキャピュレット夫人の甥、ティボルトを殺してしまう。ロミオは追放の罪に処せられる。一方、ジュリエットはパリスと結婚することを命じられる。ロレンスは二人を添わせるべく、仮死の毒を使った計略を立てる。しかしロミオはジュリエットが死んでしまったと思い彼女の墓で毒を飲んで死ぬ。その直後に仮死状態から目覚めたジュリエットもロミオの短剣で後を追う。そして両家は、ついに和解する。

#### 2.2 要素の選択と解析方法

1. 作品の構成を経時的に考察するために、要素として「愛」、「憎しみ」、「死」を表す単語を選び、場面ごとに頻度を調べた。

2. 得られたデータに離散値系ウェーブレット変換の多重解像度解析を適用<sup>9)・10)</sup>する。Table 1に要素を示す。

Table 1 Selected Element

要素	事例
第1要素「愛」	love, loved ...
第2要素「憎しみ」	hate, hateful ...
第3要素「死」	death, dead, die ...

「愛」、「憎しみ」、「死」の要素にベクトルの概念を用いる。「愛」を基準ベクトルとして、ベクトルをグ

ラムシュミットの方法によって全て直交化し、重複要素を除く。さらに直交化されたベクトルを単位ノルムに正規化する。正規化されたデータにウェーブレット多重解像度解析を適用する。本研究では基底関数は演算処理の意味が把握できるドビッシーの2次を採用する。

2のべき乗  $n$  の要素からなる  $n$  次のデータベクトルを  $Y$ , ウェーブレット変換行列を  $W$  とすればウェーブレットスペクトラム  $S$  は次式で与えられる。

$$S = WY \quad (1)$$

ウェーブレット多重解像度解析は、レベル1はスペクトラムベクトル  $S$  の第1要素のみを残し他の要素をゼロとしてウェーブレット逆変換式 (2) で得られる。

$$S' = \begin{bmatrix} s_0 \\ \cdot \\ \cdot \\ s_{17} \end{bmatrix}, \quad D_0 = W^T \cdot S' \quad (2)$$

他のレベルも式(2)と同様にして得られる<sup>3),10)</sup>。

### 3. 結果と考察

『ロミオとジュリエット』におけるウェーブレット多重解像度解析の代表的な結果をFigs. 1-3に示す。横軸は本作品の最初から最後まで場面ごとに構成要素を時系列に並べた。縦軸は要素の場面ごとの頻度を表す。

#### 3.1 解析結果

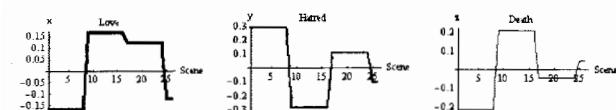


Fig. 1 Level 3 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Feelings “Love”, “Hatred”, “Death” in “Romeo and Juliet”.

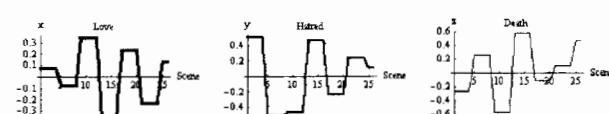


Fig. 2 Level 4 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Feelings “Love”, “Hatred”, “Death” in “Romeo and Juliet”.

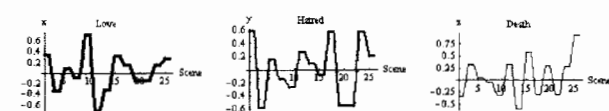


Fig. 3 Level 5 of the discrete wavelets multi-resolution analysis: Feelings “Love”, “Hatred”, “Death” in “Romeo and Juliet”.

まず、Fig. 1のレベル3は全作品を4分割した場合で、「憎しみ」が支配であり、9-16章では「愛」と「死」、17-24

章では「愛」と「憎しみ」が積極的に用いられ、同じような揺れが見られた。

次にFig. 2はレベル4で全体を8分割した場合である。「死」の揺れが大きく支配的である。「愛」は前半大きくゆれながら後半少なくなり、「憎しみ」と同じ傾向が見られる。一方「死」は逆に多くなる。

Fig. 3はレベル5の結果を示す。これは全体を16分割した場合である。1-4章の「憎しみ」の後に8-12章の「愛」に大きな変化が見られる。17-20章の「憎しみ」は「死」と同じ傾向があり、再び「憎しみ」に大きな揺れが見られるが、「死」は終焉に向けて拡大する。

### 4. 結論

①前半部は主人公両家の「憎しみ」が多く、中間部では「愛」と「死」、後半部は「愛」と「憎しみ」が多くなっている。このことから、本作品が「愛」と「死」、「愛」と「憎しみ」の二つの対立がテーマとなっていることが示された。

②前半部の「憎しみ」の後は「愛」の揺れが大きく、後半部の「憎しみ」の後は「死」の揺れが大きく、「憎しみ」が「愛」から「死」への転換の契機となっていることが明らかとなった。

③若い主人公らの「愛」と「死」を通じて両家の「憎しみ」が和解へと導かれる過程が示された。

④『ロミオとジュリエット』においては主人公の恋愛だけでなく、敵対する両家の憎しみが主人公の運命をも支配しているといわれている従来の説が検証された。

### 参考文献

- 1) Shakespeare, w.: “Romeo and Juliet”, Cambridge Univ. Press, London (1961).
- 2) 村主幸一, 『ロミオとジュリエット』のジェンダー地理学, あるいは空間と死, 言語文化論集, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, Vol. 27, No. 1, (2005) pp. 167-183.
- 3) 増田真里, 『ロミオとジュリエット』—愛と時について (授業のレポートから), 常葉英文, 常葉学園短期大学英文学会, Vol. 22, (2002) pp. 60-69.
- 4) 稲富健一郎, ロミオとジュリエット—死を超越した完全な恋愛詩, 香川大学教育学部研究報告 第1部, 香川大学教育学部, Vol. 113, (2001) pp. 23-37.
- 5) 大島芳材: 「ロミオとジュリエット」の悲劇について, 立正大学人文科学研究年報, Vol. 17, (1980) pp. 18-23.
- 6) 佐野昭子: ロミオとジュリエットにおける「死」の観念, 御茶ノ水女子大学人文科学紀要, 御茶ノ水女子大学, Vol. 29, No. 1, (1976) pp. 13-30.
- 7) 梅田倍男, 「ロミオとジュリエット」論—愛と死の主題, 愛知教育大学研究報告 人文科学, 愛知教育大学, Vol. 35, No. 12, (1986) pp. 33-46.
- 8) 鈴木喜久雄, 愛と憎しみのアンビヴァレンツ—「ロミオとジュリエット」をめぐって, 法政大学教養部紀要, 法政大学教養部, Vol. 57, (1986) pp. 225-236.
- 9) 齋藤兆古: ウェーブレット変換の基礎と応用—Mathematicaで学ぶ, 朝倉書店 (1998) p. 39, pp. 93-95.
- 10) 堀井清之, 齋藤兆古: 特許「文学作品解析方法および解析装置」, 特願 JP10-102673A.